金が出ずに、なしの産まれた話

小川未明

青空文庫

ある金持ちが、毎日、座敷にすわって、あちらの山を見ていますと、そのうちに、

「なにか、あの山から、宝でも出ないものかなあ。」というような空想にふけりました。

その山というのは、あまり高くはなかったが、形がいかにもよかったのです。

ちょうど、そのころ、旅の技師が、この村を通って、

「この山には、銅がありそうだ。」といったというわさを金持ちはききこみました。

「やはり虫が知らせたのだ。毎日、自分はあの山を見ていると、なにか宝がありそうな気がしてならなかった。」

ある日、金持ちは、金づちを腰にさして、山へ出かけてゆきました。そして、山の中に、頭を出している石を、コチン！　と打っては、欠いてみました。すると、ぴかっとして日の光に、金色にかがやくものがまじっていました。それから、夢中になって、あたりに落ちている石を割ってみたり、拾い上げて、日にさらしてみたりしますと、どれにも、なにかぴかぴかと光るものがはいっていました。

「銅ばかりでなく、金が出るかもしれない。」

金持ちは、もう頭の中は、宝を掘りあてたときの喜びでいっぱいになって、考え顔をしてもどってまいりました。

それから後のことです。

「地主さんのまくらもとへ金の仏さまがお立ちになって、山を掘れとおっしゃった……。」とか、

「だんなさまが、お座敷にすわって、あちらを見ていなさると、山の方で、金の仏さまが手招きなさった……。」とか、村にはいろいろの話が持ち上がりました。

三人の熟練した坑夫が、北の遠い島から、呼ばれることになりました。

「さあ、宝を掘りあてて、大金持ちになるか、貧乏をして、裸になるか、運だめしだ。力のつづくかぎりやってみよう。のるもそるも人間の一生だからな。」

金持ちは、ついひまなものだから、ちょっとした空想が、大きなことになったので、自分ながらあきれましたが、もう、そのときは、村の人たちもたくさん仕事に雇われて、働いていました。島からきた、三人の坑夫は、めいめいいうことがちがっていました。

「この山には、銅も、銀も、金も、鉄もあるけれど、まだ、年が若い。」と、一人がいいました。

これを聞いた金持ちは、

「年が若いそうだが、もう、何年ばかりたつと、ちょうどよくなるかな。」とたずねました。

しかし、これは、木や、人間のようなものではありません。坑夫は笑いながら、

「五千年から、一万年ばかりですかな。」といいました。金持ちは、頭を振って、

「それじゃ、孫の代の役にもたたない。」と、ため息をついたのです。

「いや、若いことはないだろう。百尺ばかり掘り下げたら、いい鉱脈にぶっつかるような気がするが。」と、一人の坑夫は、自信ありそうにいいました。

そこで、その事業にかかることになりました。

いままで、さびしかった村は、急に活気づいて明るくなり、にぎやかになりました。煙突から、黒い煙が上がり、トロッコは、あちらの坂を音をたてて走りました。

しかし、地中の秘密や、人間の運命は、ひっきょう、だれにもわかるものでありません。一年とたたぬうちに、金持ちは、財産を費いはたしてしまいました。その時分から、いろいろな、金や、銅の気のある石が出てきました。

三人の坑夫も、いまここでやめてしまうのは、惜しいものだといいました。

「じゃ、もうあと一月。」

「あと十日。」

こうして、希望を追って無理の仕事をつづけるうちに、金持ちは支払いができなくなって、どこへか姿を隠してしまいました。昨日まで、走っていた、トロッコは止まる、煙は、煙突から立たなくなりました。村は、昔のように、さびしくなりました。村の人たちは不平をいいながら、ふたたびくわを取るようになりましたが、島からきた三人の男は、帰る旅費もなく、いつまでも、山の小舎に寝起きをしていなければなりませんでした。

「兄弟こんなめにあうくらいなら、くるんでなかったな。」

「おれは、いい仕事にありついたと思ってやってきたんだに……。」

「はやく、旅費だけでもかせいで帰りたいもんだ。」

三本は、顔を見合わせて、こんな話をしていました。そのうち一人が悪い疫病にかかりました。二人は夜も眠らずに看病しましたが、彼らも、感染して、三人は、まくらを並べて倒れると、苦しみつづけて、遠い故郷を夢に見ながら、とうとう、前後して、死んでしまいました。

村の人たちは、三人の坑夫の身の上を憐れに思いました。その死骸を山にうずめて、ねんごろに弔い、そこへ、三本のなしの木を植えたのでありました。

山の上を通って風は、なしの若木を吹きました。山の上を過ぐる雨は、なしの木の葉をぬらしました。こうして、月日は、たっていったけれど、なしの木には、花が咲きませんでした。

「この木は、花が咲かないな。」と、ここをあるくたびに、村の人はいくたび、木をながめていいましたでしょう。

しかし、三人のなしの木は、伸びて、大きくなりました。そして、木はあちらの海が、見えるほどの高さになったとき、はじめて、三本とも白い花をつけたのであります。めじろや、ほおじろが、その枝にとまって、明るい海の方の空を見やりながらさえずりました。

三本のなしの木は、夏の末には、いずれもみごとな実を結びました。村の人は、それをとって食べると、あまり、その味がうまかったので、たちまち、評判になりました。

「この村に、なしの木を植えるべえ。」と、百姓たちは考えつきました。

昔、金持ちの住んでいた屋敷も、荒れはててそのままになっていたが、いつしか、そこにもなしの木の苗は、植えられたのです。春になると、村のあちら、こちらに、雪のような、白いなしの花が咲きました。そして、いずれも、夏のころにはみごとに実ったのであります。

「どういうものか、この土地は、なしに性が合うとみえるだ。」

こういって、村の人は、平地といわず、山地といわず、なしの木を栽培して、これを名産にしようと企てました。やがてこの村は、なしの名産地となりました。すると、方々の村々でも、金もうけのことなら、なんだって見逃しはしないので、かぎりなく、なしの木を植えたのであります。それは、あの雲をつかむような、銅や、金や、銀を掘り出すのと、わけがちがったからです。しかし、このなしも、どこにも、よくできるというのでなかった。ただ北海の波の音の聞こえるだけの広さにかぎっていました。そして、ほかのより、水気があって、甘かったけれど、また、なんとなく、その味には、淡い哀しみがありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　7」講談社
　1977（昭和52）年5月10日第1刷発行
　1982（昭和57）年9月10日第6刷発行
底本の親本：「未明童話集5」丸善
　1931（昭和6）年7月10日発行
初出：「童話文学」
　1930（昭和5）年6月
※表題は底本では、「金《きん》が出《で》ずに、なしの産《う》まれた話《はなし》」となっています。
※初出時の表題は「金が出ずに梨の産れた話」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：きゅうり
2020年4月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られま

した。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金が出ずに、なしの産まれた話

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/